

おおよまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成20年
12月号

通巻 460号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

発行日 平成20年12月23日
発行所 大倭出版局
〒631 0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44 0015
印刷 大倭印刷製
定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
振替口座 01050 6 67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



気多大社(石川県羽咋市)の「入らずの森」 齋藤 正宏さん撮影(文化行事報告・5頁)

昭和38(1963)年9月2日 東光大祭法話より

本当の日本の宗教として立つ

法主 矢追 日聖(満51歳)

旧七月十五日、
天に示された奇瑞

私は、始め、「八紘会」という名称において、この社会に対して純然たる宗教的な指導強化の仕事をしておりました。ところが、昭和二十年の終戦当日、神様の命令によって、大倭の大神さまの前において、「大倭教」という名のもとに宗教的な仕事を始めるということを選び、再出発致すこととなりました。それ以来、本当に神のまにまに、言い換えれば神ながらに、今日まで大倭の歩み方をしてきたわけでございます。

大倭教として立つ場合に、人間社会におきましては一つの中心点がなければいけない。それをどこに定めるのであるかということが、まだ昭和二十年の時にはつきりしていなかったのですが、そのうちに神の方から示すというようなことになりました。

その明るる年、確か新暦の八月十二日と記憶しておりますが、旧暦では七月十五日で、仏教のお盆の日でした。旧暦は年によって新暦での日が変わるんですね。今年の場合は、旧七月十五日は新九月二日になっております。

その日の夕方には、太陽が西の山に沈む時刻に、東の山から満月が上がるんですね。私は丁度、この鏡池の堤で俯いて草を刈っておったんですけれども、それがもう、上の方から首筋持つてパーツと天の方に引っ張り上げられるんですね。なんぼ力を入れて俯いて草刈っても引つ

張り上げられるので、素直にすうつとそのまま頭を上げてみたところが驚いたわけですよ。

東の方の、春日山からずっと巻向山脈にかけての山際が、朝日の昇ってくる如くに綺麗な光を放っておって、そこからお月さんが出てきたんです。

西の方は夕日が沈んでおるんですから明るいですけれども、東の春日山から、紫色とちよつと桃色がかっている四本の光がサーチライトのように広がって、西へ向かって生駒山の上に乗まで広がっているんです。それがまた自分の頭の上だったんですね。つまり、この今現在の大倭大本宮の土地の上空にかぶさっていたわけです。

自然現象ですから、これはもう私だけじゃなく誰にでも見えたと思いますが、そういう余りにも綺麗で、奇瑞に属するような現象を、ある程度感に打たれてじつと眺めておりました。

するとその時に、天から声が聞こえてきたんです。「黎明は訪れたり、東方の光、大法は立てり大倭太加天腹」とね。

もうそれだけの文句なんですけど、丁度、謡曲が長唄のような、非常に流暢な一つのリズムでもって聞こえてくる。そしてそれが二、三回繰り返されたんです。

まるでお伽噺か何かのような神秘的な話で、まあ皆さん方には分かりにくいかと思うんですが、これが私の体験なんです。

聖武天皇の懺悔の思い

そこではばらく、じつと瞑想にふけっておったんですが、その時に聖武天皇とか光明皇后が出てこられました。そして特に聖武天皇から、分かり易く言い換えれば「この場所において、本日の日本の宗教というものを立ててほしい」「現代の宗

教というものは、余りにも本筋を間違えているんだ」というようなお言葉があったんですね。

奈良朝の政治、あるいは文化とか仏教というのは、ほとんど光明皇后の靈感に基づいて、大倭のこの場所から出てきていたらしい。ここが一つの参謀本部のような存在であつたらしいんです。

光明皇后の念願により、仏の道において世の中を治め鎮め、社会のみんなの幸せを願うために、あるいはまた女人の罪滅ほしのために、国分寺と国分尼寺を日本全国に建てるということが、一つの政治力でもって巨大な費用を使って実行されたんです。

ところが、その結果たるや、全然、聖武天皇が理想としたような国にはならなかつたんです。らしい病のような日本にはなかつた病気も入つてきました。また、大陸から技術者なども日本にたくさん来たけれど、その中には日本の国体そのものも揺すぶるような者もおつたんです。例えば、これは時代がちよつと前になりますけれども、崇峻天皇は（在位587〜592年、蘇我対物部の対立激化、蘇我の勝利となる。蘇我馬子の専横を憤り倒そうとし、かえって暗殺された）、帰化人に殺されております。天皇ですら暗殺されるような支那の思想と日本の思想との違いがあつたんですね。

仏教によって国を治めるつもりで、貴重な国費を使い東大寺の大仏建立もしたけれど、そのために人民からいろんな税金も絞り上げていりし、一般庶民階級の人間は食うものも食えない。あちらこちらでのたれ死にする者もある。そこへ悪病も流行つてくる。このように、仏の極楽浄土とはもう全然正反対のような、非常に情けない現実社会が出来たんですね。

聖武天皇は、そのことを非常に懺悔されておる

面があるんです。それから今日まで約千二百五十年経つわけですけれども、聖武天皇自身が理想としたような宗教、本当の神の心、神意に沿つた宗教によって、世の中を治めていかなきゃいけないという思いは消えずにあるんです。

それは別に仏教、神道、あるいはキリスト教とか、そういうような特定の宗教でなしに、大きな言葉で言えば「大乘的救済」となるんです。

今は世の中もだんだんと進歩してきておりますが、その割に、人間の精神や心の世界というものは進歩していません。だからして宗教にあらざるような宗教が非常に発展していくというのが、今の世相です。そこで霊界の方では、本当の意味の真面目な宗教を作らなければならないということになつたんです。

そしてこの大本宮は、聖武天皇や光明皇后にゆかりの深い場所で、昔は「須加の宮」と言いました。そのためこの土地に大倭の宗教の本部を設置しなきゃならない、一つの宿命的なものがあるというこのようなんです。

これは霊界の計画でありますから、我々は分かりませんが、昔の大失敗を今の世に繰り返さないようにという聖武天皇の念願によって、たまたまその大きな役目を持って大倭が今ここに立っているんです。

人間で言つと千二百五十年の年月は長いですが、霊界でも長かつたらしくて、天に奇瑞が現れた旧七月十五日の、その瞬間において、「今日の日を待つておつた」というような非常に喜ばれた言葉が聖武天皇からはあつたんです。これは私一人だけの話しですから、他の者では分かりませんが、そういう話しとして聞いておいて下さい。

そのようなことがございまして、それから毎年

旧七月十五日は東方の光の出た記念の日であり、大倭教を广泛宣传するところの記念日にもなるんです。よく「アジアの光」とか「東方の光」とか「光は東より」とか、過去にいろんな人がそのように唱えておりますけれども、やはりこの場合も、東からの光によって奇瑞が現れたんですから、「東光大祭」ということにしたわけなんです。

霊界の大倭というものを代表して、私がこの世に生まれ、それまでも色々宗教の仕事をして参ったのですけれども、この時に初めてこの土地に腰を据えて、純宗教として、本質的な宗教の活動をするという、深い深い因果関係がはつきりと現界において実現した記念の日にも当たるんです。

祖霊祭の意味

また東光大祭の日には、身近なお互いが修養し、あるいは霊的浄化もして一歩一歩進歩していかなければならないという意味におきまして、祖霊祭というお祭りも付け加えてございます。

これは、大倭に近付いておる方々の祖先の靈魂をお祭りするんです。仏教ではよく「施餓鬼」とか「回向」とか申しますけれども、祖先の御霊を子孫の者みんなが寄ってお祭りするという意味で、大倭では「祖霊祭」と申しているんです。

それには、別に卒塔婆に書かれた戒名でもよろしい。いかなる宗教の名前であっても、それはその人の一つの符号、記号でありますから、霊の本体というのは同じことなんです。その名前でもってこちらが波長をつなげば、その霊の本体が出てきます。ここでは仏教、神道、キリスト教、何であらうと関係ありません。仏教は日本の国教とまで言われており、ほとんどの方が戒名を付けておられますから、それはそれで結構なんです。

現界において我々は、まあ吹いたら飛ぶような貧弱な仮拜殿で祖霊祭をやっておりますけれども、大倭の霊界の方では、大きなお祝いの祭典儀式が繰り広げられているんです。それは現代の日本の土地において、大倭教として宗教的な活動をするために霊の世界から祈念された謂れのある日でございますから、大倭の霊団の一番高級な霊から一番下級な霊までが、人間で言えば晴れの姿で、全部、同じこの大本宮に集まっております。

そういうような日でございますから、皆さん方のご先祖も、大倭に縁のある方も、縁の薄い方も、全部引き寄せまして、霊界のその祭典に列席してもらっていただけます。そういうような機会があればあるほど、霊的な資格とか浄化とか、我々人間では分からない進歩がある。やはり霊界でも一歩一歩進歩しておるんです。

それは、迷っているとか浮かばれないとかいう先祖や、餓鬼道に落ちている者を仏教式にただ救うというような、生ぬるい話ではないんです。あるいは死んだら六道の辻でどうなるとか、地獄へ行くとか極楽へ行くとか、皆さん方は色々聞いておられるかもしれませんが、大倭の霊界というものは人間社会によく似ているんです。我々現界の人間は肉体を持っておりまして、霊界には肉体のない人間ばかりが集まった、一つの大きな社会があります。

霊界には、日本・支那・朝鮮・インド・英国・アメリカという人間が作る環境、あるいは人種の差別のようなものは一切ないんです。だから、大倭の霊団から現界において異国人として生まれていく霊もあれば、また向こうの霊が日本に生まれてくる場合もあるんです。仏教でも、こういうようなことは説明しておりますけれどもね。

その祖霊祭に皆さん方がお参りになることによ

って、縁のある先祖代々の無数の靈魂が、霊界大倭の年に一度の大いなる祭典の場に列席できる資格を得たわけですね。そうすると、皆さん方のご先祖が霊界において非常に喜ばれます。ということとは、一番縁が深い血を引いている子孫に、その喜びの心が移って、幸せが訪れてくるということにもなるんです。

そのように良いように回転しておれば結構なんですけれども、これが悪循環する場合、言い換えると先祖さんが苦しんでおって喜びを持たない場合には、その思い、気持ちの波長が、現在生きている子孫やその家族に移ってくるんです。そうすれば、何か心配事が起こったり、悩んだり迷ったりする事柄が次々と出来て、それをまた逆に先祖さんに持っていくことになる。悪いように悪いように、ぐるぐるぐるぐる回っていきます。

良いものは良いように回り、悪いものは悪いように回っていく。だから先祖さんを喜ばすということは、子孫が繁栄するんだというように簡単に説明できることになるんです。

そういうような意味合いでございますから、今日は皆さん方のご先祖も大倭の晴れの舞台に引張り出してもらって、非常に喜んでおられると思うんです。その喜びというものが、また皆さん方現在の生活の中に移ってきますから、現在の家族の中においても、また喜びを持つというようなことが出来てくるんです。

仏教では「回向」という言葉で非常にうまく説明してくれています。だから先祖の回向供養をするんですけれども、割合に、意味がはつきり分かん者が多いんですね。

例えばお盆になると、坊さんが「施餓鬼」と言って法事をしてくれる。これはなるほど良いんですけれども、私は言葉がどうも気にくわないので

すね。これでは、先祖さんを餓鬼扱いして、「餓鬼道に落ちてるんやから供養してやろう」というような形になります。何も先祖さんがみんな餓鬼道に落ちてるわけじゃないのに、お寺さんのやり方でいくとそう仮定していることになる。

これはお盆というのが、お釈迦さんの弟子の目連尊者の母親が餓鬼道に落ちていたのを救うために供養したという故事によって始まっているので、先祖供養という意味に「施餓鬼」という言葉を使っているだけです。だから、気にすることは要らないんですけれども、やはり言葉には生命があり言葉が働くんですから、私は、「祖霊祭」と名付けておるんです。

宗教の序の口だけでも

なるほど、皆さんのご先祖さんの中には仏教で言うように、やはり畜生道に落ちておるような者もおれば、あるいは餓鬼道に落ちておる者もおります。また中には、いわゆる天国のような所へ行っておる先祖さんもおります。けれども、結局それは、全部、自分達の先祖なんですよ。

今、みんな顔が変わっていますけども、これが一代前、二代前、十代前、百代前、あるいは千代前とか、そういう風にして、ずっとお互いに遡っていった場合ね、結局先祖さんは一つみたくていってしまう。言い換えれば、枝葉に分かれてきているんです。分かれ分かれてきて、名字でも色々変わっているだけのことなんです。

一つから色々分かれてきたという根本を考えたら、「あの人とわたしは他人や」とかいうような気持ちでなく、「自分も他人もお互いに幸せな人生を送ろう」というように、自他平等の気持ちにおいて、まず考えなければいけないんです。

第20回大倭会文化講演会報告

交流(むすび)の家と私

講師 神谷 文義さん

十一月八日、雨の降る悪天候でおまけに寒さが厳しい中、岡山県瀬戸内市にある長島愛生園より神谷文義さんを迎え、講演をして頂きました。

講演に先立ち、講師の神谷さんとの打ち合わせは勿論、一切の段取りに關しまして準備会のスタッフには大変ご苦労かけました。そのお陰で講演は、とても時間が短く感じるほどに語って頂き、参加下さった皆さんも外の寒さを忘れるぐらい、聞き入っておられたと思います。

神谷さんは、昭和四(一九二九)年、愛知県半田市生まれ。昭和二十一(一九四六)年、ハンセン病と診断され、昭和二十三(一九四八)年、十九歳の時に国立療養所長島愛生園に強制隔離されたそうです。

今回、神谷さんとご縁を頂いたのは、昨年五月

こんなことは宗教の初歩で、何でもない入り口ではあるけれど、一般に、話しでは分かってても、なかなか実行はできない場合が多いんです。大倭の皆さん方は、お互いにそれを実行して、「一歩でも人間的に進歩しようやないか、向上しようやないか」と、先祖を喜ばす意味においても、自身が人間として向上しなければならぬんです。

いつも私は言うんだけど、仮に大倭に出て来て神さんに手を合わせるなら、自分のご利益を願うとか、あるいは自分の欲望を叶えてもらおうというような欲張り根性じゃ、これはもう駄目なんです。

だから皆さん方は、自分の欠点を自分で補い、

講師の神谷文義さん ▶



末に「おおやまと編集部」が、岡山県へ小旅行をし、その時に長島愛生園へ立ち寄りさせてもらったのがはじまりです。神谷さんにお世

話願ひ、園内の案内やハンセン病でのご自身の体験談を聞かせ下さいました。後世に伝えて行くため、自らハンセン病の語り部をされている神谷さんのお話を是非大倭でも聞かせて頂きたいと、早速無理をお願いし、今回おいで頂いた次第です。

(中村千久佐記)

自分の心に角があれば、その角を取って、誰にも好かれる自分を作り上げていくというような線に向かつて、手を合わせて努力してほしい。自分の身内の者であろうと他人であろうと、誰にでもこの人にも自分が好かれるという、何でもないことやけれども、それ一つだけ出来ても大したものだと思います。

そういうことは、もう宗教のほんの初歩、ほんの序の口なんです。まずその序の口からでもね、出来たら結構だと思うんですよ。

そういうような意味において、一つ信仰の道に精進していただきたいことを願うんです。

(文責・編集部)

平成20年10月26、27日
第300回記念 大倭会文化行事報告

能登半島、和倉・輪島方面へ

文化行事前の兆し

あじさい邑 杉本 順一

一泊文化行事に久しぶりとなる妻の志津女と参加できた。

今回の旅行では数日前から兆しがあった。それは「和み」の藤田啓子さんから始まった。彼女が友人と文化行事旅行の話をしていたら急に体が調子悪くなったと駆け込んでこられた。体だけの不調ではなさそうなので、何だろうと思っ



氣比神宮(福井県敦賀市)の天筒山

お訪ねする予定の「氣比神宮」からのお使いと言われる霊人が出てこられ「オオヤマトデ シヨクサレルモノヲ イツピン オモチクダサレ」とのことである。藤田さんにお茶と共ににおにぎりでも持参しようかと話しておいた。

出発日の午前四時ごろ、長女は頭が痛いと思ひ起きた。そのとき私にはワインのビンが見え「ワイン」と言う声を感じた。この旅に持参すべきものであることは直ぐに分かった。でも何でワインなんだ？と考えて気がついた。そういえば我が家に今日本酒が無いのである。ワインを小ビンに入れて持参することにした。

朝八時三十分、参加者三十三人の賑やかなバス旅行が始まった。

最初の訪問先「氣比神宮」についた。バスを降りたが雨の歓迎である。直ぐに目の前の見事な神奈備に気持ちが悪く。山の龍神さんに挨拶する。記念撮影のためいったんそこを離れ撮影後に、最初に挨拶した場所に戻り、この神奈備を信仰の中心にして暮らしてこられたたくさんの霊界人達に心ばかりのおにぎりやワインをお供えして約束を果たした。

この後、境内神社の「角鹿神社」へ。渡来人、都怒我阿羅斯等命がご祭神)に行く。見事なタブの大木がある。大陸から渡来してきたたくさんの人達が歓迎してくれたようである。「チノチカキモノユエ ヨロシクナム ツヌガアラシト」と李章根さんに伝えてほしいと言う。

昼食をはさんで次に「氣多大社」を訪ねた。始めの予定には入っていなかったらしいが急遽コースにいられてもらったとのこと。バスを降りたら菊花展の看板。片手でカメラを回す。雨の歓迎がすごい。拝殿では日本男性とイギリス女性の結婚式があったようので記念撮影をされていた。

ここは大倭神宮と同じ御霊が中心に祀られているとのことなので、私は本殿への挨拶もせずに直ぐ右側に広がる「入らずの森」の入り口に立った。降る雨は普通ではない。ここでもこの森と共に生きてきた原住の民がわんざと出てこられる。持っていたおにぎりやワインでご挨拶した。

社務所の前で雨宿りしながら、ただ事ではない大雨で何を霊界人は言いたいのかと考えていたら、「コノアメニヨツテ ケイダイヨキヨメテホシイ」とのことであった。現代人は地球を汚しているとよく言われるが、現代人が持つ「ご利益信仰の心」もまた形無く地球と言う加美を汚していることになると思っただ次第である。結局私達がバスを降りて境内を廻りバスに戻るまでの時間だけ大雨にさらされたことになる。

バスは「ホテル海望」に向かい、そして夜の宴会に心が向いていく。

生まれ故郷の風土へ

あじさい邑 齋藤 正宏

今年の旅行は、北陸道を敦賀・氣比神宮(越前国一宮)より能登へとたどる地域「古志」を訪ねるみちすじであった。

文化行事は慰霊の旅ともいわれ、古よりその土地におられる先住の方々をお訪ねし、縁を結ぶ旅であるらしい。……とすれば、福井で生まれ育ち、能登地方にも多少馴染みをもつ私には、いわば生まれ故郷とでもいふべき風土を、大倭の皆さんと一緒に訪ねる、或いはお迎えする機会だったわけである。しかしそんなことは旅が終わった後に気づいたこと。当初は、毎日の暮らしから、ちよいと外れての骨休めが目当ての参加であった。氣比神宮に降り立つと、すぐ目に入ってきたの

は小雨にけぶる天筒山だつた(5頁写真)。きれいな神奈備(神体山)である。かつて角鹿津と呼ばれ、東は津軽を経て渤海(高句麗系)へ、西は出雲、筑紫を経て新羅へと、船舟が行き来した日本海の要衝・敦賀を見下ろし、この地の先住者や、様々なくにより去来する人々を見守ってきたのだらう。

お山に向かつて手を合わせていると、ふと古人たちのもつていたおおらかで人懐かしい息吹が、かつての喧噪とともに蘇ってくるような気がした。

敦賀を後にした私たちは、越前・坂井平野を抜け、北陸高速道路をさらに北上した。天候は回復せず、加賀台地の神奈備・白山は、低くたれ込めた雨雲の彼方に隠れたままである。やがて風景は青灰色にくすんだ海岸線へと開けた。いよいよ能登である。

能登国一宮・気多大社は、吹き荒れる雨風をもつて出迎えてくれた。あまりの激しさに、入り口での記念撮影もままならず、そのまま境内地奥の「入らずの森」へと急いだ。急ぐというより、何やら切ないような慌ただしさにせつつかれて、鬱蒼とした杜に向かつて参拝した。

……ずっとずっとと久しい間、忘れ去られ、待ち続けてきた、先住のものたちの「想い」に出会ったようだった。冷たいはずの風雨の中で、むせび泣き、こみ上げてくるような熱いものを感じつつ手を合わせていた……。

参拝が終わってバスへと引き上げる途中、ふと両脚が弱まったことに気づいた。後ろ髪を引かれるような感じがして、杜に引き返し、祈りを込めてシャッターを切った(表紙写真)。

和倉温泉では、同室した高橋・見田さんたちと七尾湾に面した窓を全開し、先住の方々に向けて

お供えを用意、あらためて祈りを捧げた。お風呂をいただいた後は、恒例の宴会。対岸の能登島上空では、その晩遅くまで稲妻が舞っていた。

翌日は、輪島朝市での買い物・兼六園での昼食を経ての帰路。大倭にたどり着いたのは、すっかり日が暮れた頃であった。

日元さん、高橋・見田さんともに、大倭神宮にて無事帰還の報告を行う。いつものように「くにも」とを詠い参拝していると、異様な程の清々しさを覚えた。目を閉じ、手を合わせる私の脳裏には、真つ白な冠・白い衣服を纏った神々しいお姿の女性が白装束の童子の手をとって現れ、微かな笑みを浮かべてたずねている。この旅で縁を結んだ方かと思いついてみたが、お心えはなかった。翌朝、杉本氏に伺うと、「光明子」・「家の子」とのことであった。光明皇后・安宿媛が「家の子」として示されるころを学ぶこと……。旅の終わりに、お土産をいただいたようである。

私にとっての旅のテーマ

京都府八幡市 林 修二

記念すべき第三百回大倭会文化行事は、雨の能登路だった。なかでも「気多大社」での篠突く雨の激しさは、生きとし生ける凡ての仲間である命達の哀しみと、それを被い清める「たかまのはら」からの慈雨とも思えた。大社の「入らずの森」で対面した本当に多くの聖霊達の悲しみと、期待と喜びに満ちた眼が忘れられない。

世に闇が広がり、何か激しい変動が起りそうな二十一世紀の初頭、「万有は同根だから一体である。この味を肌で体得することが、世界平和の基礎となる」との法主様の教えは貴い。人類といわず、動植物といわず、目に見えないものも凡てを

含めた多重で、多岐に渡るモノ達の、互いに交流あう生命の営みを目指して、今しばしの現世での、私自身の日常的な生き方を問わなければと心に念じた。

表面上は淡々と過ぎた今回の文化行事には、やはり大きなテーマが一方にあった様に思える。幾つかの私自身の心に残った小さなエピソードを紹介して、その事を語りたい。

夜、恒例の宴会(大倭文化祭?)が和倉の宿「希望」で繰り広げられた。その祝祭の様々なるさは希望であり、翌早朝、宿の部屋から望んだ七尾湾の穏やかな海と、静かに横たわる能登島の姿は、心に静やかな安穩を与えていただいた。そしてその折、同室となった李章根父子が二人きりで、その朝の静かな七尾湾を共に見つめておられた穏やかな光景が深く印象に残った。

又、九十四歳のご高齢をおして今回も無事参加された日元さん、そしてそれを可能とせしめ、支えられた青山ご夫妻と山崎ご夫妻のきめ細やかな父への思いやりも心に残った。車椅子を押される姿、食事の世話をされる姿、そしてそれを見守られている姿等々、旅の様々な場面でそれは見受けられた。

さらに旅の二日目、以前、水俣の高倉敦子さんのお父様が旅の途中、輪島の朝市見学時に亡くなられたという場所で慰霊をした。それも又、今回の父と子を結ぶエピソードの一つであった。

最後に私事で恐縮ではあるが、私はわずかな間隙を縫って、夜の闇の迫る頃、宿となった和倉温泉から程近い義父の住まいする七尾の家を訪れた。束の間の再会を果し、義父と握手をかわし、ドアを出てバス停にむかい、立ち止った信号機の前から家の方を振り返った。すると、七尾駅前画整理に一軒だけ取り残された建物、十数年前

に亡くなった義母と共に長年守ってこられた古い床屋さんが、夕刻に賑やかな駅のビル群から少し離れて、ひっそりとオレンジ色の灯に浮んで見えた。瞬間、義父に寄せる妻の心情に思いを馳せた。

これは全くの個人的な感想だけれど、今回の旅の様々な場所で、「父と子」という主題が頭をよぎった。同時に、「父は教え、子は学ぶ」「父は伝え、子は引き継ぐ」との感応も得た。

あの旅の日から、私には霊界の大倭に今も存在する「鶏の火」、「和の光」が見える気がする。燦然と輝くその光が……。家族と家族、友と友、天なる父と我ら地上に生くるもの達との大いなる和解の火が。そしてその火はまた、現界における新しい始まりの何かの合図の様でもある。

正しく今回の文化行事は私には、父と子の情愛に、激しさと優しさを見せた能登半島の母なる海の生命が通う、壮大な旅であつたと思えるのである。

父と子の情けを結び、能登の旅

迎えて吼ゆる 海の龍神

【こぼれずみ】 新潟県佐渡市 大滝 哲也

10月号の風ぐるま『森からきた便り』、全く同感です。佐渡ではこの秋に、中国から譲り受けた朱鷺の子孫が放鳥されましたが、国の偉いさん達は要するに、学名「Nipponia nippon」が「ニッポンから消えることはけしからん」という威信でやってくるように感じます。朱鷺のことを本当に思っているなら、絶滅が危惧されるほど数が減る前に、もっと何か出来ていたはずですよ。

しかし、今の人間の自然との関わり方について、地元住民がもっと考えるきっかけになると思うので、結果的には良い方へ行くことを期待していますが。

第250回記念大倭会文化行事にて 平成7(1995)年10月29~30日

法主さん、最後の泊旅行のお話より

琵琶湖の湖東、御上神社・長浜(泊)・石山寺などを巡る

おはようございます。辛うじてこの程度で、だいぶ声も出にくいんやけどね。

昔、『すさのお』の表紙に、各地の神奈備を載せました。この御上神社にも柴地(則之)と一緒に二、三回来ていますから、柴地を想い出します。

八月頃には、今日参加できるか自信がなかったんです。仰向けに寝たまま口開いて小鳥みたいに、さじで入れてもらうような状態でした。ところが大体九月一杯で厄払いが済んだらしいです。十月から変わると、これはまあ霊界からのお達しがありましてね。

九月の時分には、まだ片手で食べていたんです。それが十月近くになったら、急速に変化して両手が動くようになりました。

この説明は、皆さんの手許にもらっているものを読んでもらったら分かるんです。名前はね、神さんのことやからいろいろありますけれど、神さんと言ったって人格神なんです。我々と同じ人間の先輩なんです。最初は、近江富士(三上山)の近くの、昔の有力者の氏神としてお祀りしたはずなんです。大倭にも同じように先輩がたくさんおります。親しい仲間や。だから大倭で呼んだかて、すぐ来るねんな。でもこの土地の人やから、今日はご挨拶がてら、お参りというよりも遊びに來させてもらいました。

平素は朝も晩もずっと一日、私とうちのおかちやんと年寄り二人の生活です。けれども今日と明日の二日間は、大勢の人と一緒に歩いて、一緒に飯食で、一緒に寝て、一緒に起きて大家族で生活できるということが、私にしてみたらこの上もな

く嬉しい楽しいです。恐らくもうこれから後、これだけの員数の人達と共に、同じ屋根の下で過ごすということはないかも知れません。

……毎年、記念になる、思い出になる出し物をやってくれますけれど、去年参加していたの今日の日、あの世へ行っている人もおりますし、また来年の旅行には全員揃っているのか、それも分からない。やはり、それがこの世というものです。だから今日の集まりは一期一会、一生の中で二度とない、そういう気持ちで楽しんでほしいと思います。今日は花魁道中は出てくるんかな。(笑)

昨晚、こつちの氏神さんに拜んで、曇るのは結構やけど、とにかく雨にはせんといてほしいと頼んでおきました。ところが朝、目を開いたら雨降つとんねん(笑)。これはまず清めの雨、邪魔している雨ではないと言ってますね。琵琶湖というのは大した竜神ではありませんが、大倭へ出て来た格違いや——喜んでね、チヨロチヨロおります。それで今日の天気は晴れたり曇ったり、みんな仲間入りをして楽しみました。

今夜はね、カラオケやとかはどこでもあんなから、私の部屋へ遊びに來いや。前の時にはみんな遠慮してたから、ちよつと淋しいと思っていました。もう会えんか分からへんのやで。楽しい記憶を残してね、それを思い出して来年また参加してほしいと思います。夜更かししたって夜明けしたってかまへん、私はしんどくなりません。いっぺんに來たら狭いから入れ替わり立ち替わりしてね、気兼ねなく遊びに來てくれるようお願いしておきます。(文責・編集部)

AWTCC誌

11月15日 大倭神宮月次祭。

大倭印刷(株)の谷川光一さんがこの日、退職されました。長年、本紙『おおやまと』の印刷をしてきていて9月号「釈迦説法図」(森脇聖淳さん画)の印刷が最後の仕事となりました。言葉どおり彼は写経を担当してくれました。有難うございました。

朝から南足柄市の宮崎たか子・育子母娘とその婚約者木村義和さんが来邑。大倭神宮月次祭にも参加されました。夜、交流の家でFIWC定例委員会。

11月23日 大倭大本宮月次祭。この日は昭和38年11月23日の法話CDをお聞きしました。

月次祭に先立ち、正午より大倭会館で収穫祭として、新米のお赤飯が振舞われました。皆さんのご協力が実りました。4時から大倭会役員会。

12月4日 大倭神宮で金鶏祭。
12月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。大倭安宿苑では

11月28日 今年度色々の表彰を受けられた6名の方の祝賀会。(菅原園)
11月10日 王寺工業高校プラスバンド部の皆さんによる演奏に皆ノリノリ!

12月4日 毎年恒例の大和キリスト教会歳末慰問。(須加宮寮)

11月9日 家族・福祉事務所・ボランティアのご協力により、家族交流会を開催しました。(長曾根寮)

11月14日 音楽クラブ。
11月20日 腹話術。11月の誕生会で、プレゼント、誕生日カードでお祝いしました。
11月26日 (デイサービス)文化祭。昼食に寄せ鍋、寿司を頂きました。

(茂毛蒔園)
11月27日 月末の「ピアノでうたおう」の集い。(八重垣園)

新年のご挨拶を申し上げます

「私の肉体に宿っている心が二つの作用をもっていて、実際は一つのものである。あたかも天にかかる月と水に映っている月のよくな形である。言い換えれば現在意識が普通にいう私とすればもう一つの方は更に更に深いところで生まれぬ先から既に存在し結ばれている最高潜在意識(自己本霊)である。」

『ことむけやはす』 やわらぎの黙示 五十頁より
「本当の自分」について考えてみませんか。
今年もよろしくお付き合ってください。

大倭六十五年 元日

おおやまと
大倭系系陽化邑

代表 矢追 家麻呂

邑人一同

鏡池の紅葉 田中敬介さん写



か。炭運ぶ人が山からゆつくり降りてきた。会釈して通る顔、目を見張って汗だく。年末出荷なのだ。

編集後記

例年日覚えたらしく夜鳴き蕎麦 森彦

来年は牛年。ゴータマ・ブツダ(釈尊)のゴーとはインドで牛の意味だそうです。スサノオの命は牛頭天王。牛は田の主であり、「主を食べる」という意味にもなるので法主さんはあまり牛肉を食されなかつたとか。家を建てる時にも中心の木をうしの木と呼ぶ地方もある。大倭65年目が始まる。(章)

平成二十年は法主さんが帰幽されてから干支が一巡した年だった。もって生まれた命(ミコト)を活かしながら、法主さんの心を受け継げるような自分に、どれだけ近づけたら。

ATM i C

* 年始祭(大倭神宮)
1月1日(祝) 午後1時から紫陽花邑内の諸霊へご挨拶。
午後2時から大倭神宮にて。

* 月次祭(大倭神宮)
1月6日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

* 大倭会主催第四八一回禊会
1月11日(日) 午後2時より大倭大宮拝殿にて。

禊(みそぎ)とは、自己本霊を覆っている枉罪を被い加美のお徳を戴くこと。「つみそぎ」と「みいずそそぎ」という言葉が一体となってきた大和言葉。禊には、知恵の研鑽によって表面から枉罪を除く方法と本心、本霊の働きによって内側から除く方法とがある。

* 大とんど
1月12日(成人の日) 午前10時より大倭大宮西の斎庭にて。

* 月次祭(大倭神宮)
1月15日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

* 月次祭(大倭大宮)
1月23日(金) 午後2時より大倭大宮拝殿にて。

心が揺れる時、『黎明大倭』を口ずさみながら、心の波長を大倭に合わす。日々、禊。自分ができることで、一隅を照らしていきたい。(鶴)